

---

# Winter Waver

小笹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Winter Waver

### 【Nコード】

N3509Y

### 【作者名】

小笹

### 【あらすじ】

前世の記憶を持って生まれてきた2人の兄弟の物語。永瀬家の兄弟、黄楊きようようと広葉ひろはは生まれながらにして、前世の記憶を持っている。2人は前世では生まれた時代も、環境も違っていたただけ、共通点があった。それは前世で愛し合った女性と結ばなかったこと…。

## 記憶

ひんやりとした空気が部屋に伝わっている。

毛布と掛け布団を全身にすっぽりと被り、静かな寝息を立てているのはこの部屋の主、永瀬黄楊だ。

彼はもうじき大学を卒業し、大学院へと進む。

今年の九月に、社会学部の学位記を授与されたことをきっかけにこの進路を選んだ。

特に就職を考えているわけではないし、黄楊自身もまだ遊び足りないと思っっているからだ。

黄楊には二つ年下の弟がいる。黄楊とは違い、真面目で努力家。

考え方も違い、自由奔放に生きている黄楊とは、それが原因で些細な喧嘩をすることもしばしばある。

もつとも、勝手に怒るのはいつも弟の方で、黄楊はというと”はい”の一言でそれを終わらせる。

この寒さのためか、黄楊は眠りから目覚めた。

なぜか頭が重く感じる。夢を見ていた所為もあるのだろう。

夢ははっきりとは憶えていないが、その中ではまた自分が弟の広葉に怒られていたような気がする。

よくできた弟だとは思っけれど、何も夢の中にまで出てきて怒らなくても、と黄楊の胸中に愚痴が漏れた。

ベッドの横に置いてあるミニデスクの上の時計を覗くと、まだ朝の八時だった。

今日の大学の講義は一時からなので、まだ時間はある。

もう一度寝ようかとも考えたが、また変な夢を見てしまったのは、より一層寝覚めが悪くなるだろうとも思い、起床することにした。

起き上がった瞬間、一気に暖かったものが身体から離れ、黄楊は寒さに身震いする。

（寒っ… もう冬だな…）

月は十一月の下旬。冬はもうすぐそこまで来ていると実感させられる寒さだった。

永瀬家は一軒家ではなく、六階建てマンションの最上階だ。

そのため夏は特に蒸し暑いが、冬はどちらかというと暖かいほうである。

だが、今冬はかなり冷え込むらしく、まだ十二月にもならないというのに寒い。

黄楊がリビングへ向かうと、弟の広葉が炬燵の準備をしていた。

毎年、永瀬家は我慢し、十二月に登場していたはずの炬燵が、もうすでに出ている。

「あれ？炬燵出したんだ」

作業中に突然後ろから兄の声がして、広葉は驚いて振り返った。

「兄さん。もう起きたんだ…そうだよ。父さんが今年は特別寒いから、我慢しなくていいって」

永瀬家は両親共働きだが、特別裕福な家庭ではないため、それなりの節約をしている。

しかしそれも、この寒さではどうにもならないらしかった。

「兄さん。今日の講義は昼からだったよね？その割には早く起きたんじゃない？」

いつもは昼からの講義であれば、十時過ぎに起きてくるはずの兄に、弟は珍しいものを見るような目で言った。

永瀬広葉は、永瀬家の次男で黄楊の弟である。

この時代では珍しく、芸能人顔でルックスは良い方だが、真面目で健全な大学二年生だ。

ちなみに恋人も一度も作ったことはない。告白されても広葉はそれを徹底的に断るのだ。

「嫌な夢を見たからな。また眠れそうになかったから、そのまま起きた」

真面目な広葉とは対照的な黄楊は、そのルックスの良さと社交性で恋愛経験は豊富だった。

現在も同じ学部と同級生に恋人がいる。

そんな兄弟だから、気が合わないのかもしれない。

二人にとって、“恋愛”という価値観は常に百八十度違っている。恋愛だけではないけれど。

「その夢って、もしかして…」

黄楊の言葉に、広葉は目を大きく開いて何かを問おうとした。

その広葉の問いかけに黄楊は“何か”を察し、即座に返答する。

「お前が思っているような夢じゃないから。ていうか、お前が夢の中に出てきて俺を怒鳴ってただけ」

黄楊は広葉の目から自分のそれを逸らし、静かにそういつとキツチ

ンへ迎え冷蔵庫を開ける。

それ以降、二人は無言だった。

同じ空間にいるのに、別の空間で、それぞれ違うことを行っているように。

広葉が黄楊の”夢”を、一体どのようなものと勘違いしたのかは、当人たちが一番よく理解していた。

しかし”その”話になると、いつも二人は喧嘩をしてしまう。

それは、二人の”恋愛”への価値観の違いであった。

冷え込みの激しい中、今日も黄楊は大学へ向かう。

本当ならまだ眠気はあるし、サボりたいところだが、今日の講義は割と好きな教師のものであるため、出席したいという気持ちの方が強かった。

こういった日は、黄楊自身の機嫌は良い方だが、今朝の弟との陰鬱な空気がまだ身体に染みており、なかなか気分は上昇しない。

（まあいいか…アイツも今日は講義受けるって言うてたし…）

黄楊が思った”アイツ”とは、彼の恋人のことである。

付き合い始めてまだ間もないが、彼好みのルックスでなかなか可愛いらしい。

一か月前に告白され、そろそろ彼女が欲しいと思っていた黄楊にとつては願ってもない申し込みだった。

以前彼が付き合っていた女性は、黄楊から振ったのだ。

束縛が激しく、そのくせ本人が他の男と話しているのをこちらが咎めても逆ギレするという性質の悪い女だった。

それに比べて今の恋人は、束縛も特別激しいわけではなく、これと違ってすぐに嫉妬するようなこともない。

自由な気質の黄楊にとっては、結構付き合いやすい女性である。

（気晴らしにデートにでも誘ってみるか…）

静かに揺れ動く電車の中、黄楊はぼんやりとそんなことを思っていた。

広葉は都市伝説や神話などを調べ、それを自分なりに解釈するという一風変わった趣味を持っている。

そついった類の話に興味を抱く人はごく少数だと分かっていたから、大学に入って彼の趣味にあった傾向のサークルがあると知った時は驚いた。

『民間説話研究会』。この研究会の活動内容は、その名の通り昔話や世間話などの研究だが、広葉の趣味である都市伝説や神話などの研究も行っていた。

名目的には研究会ではあるが、実はただ会話をして終わるという日も少なくない。

真面目な広葉にしてみれば、そんな一面も新鮮で、今では同じ研究会の仲間と会うことは楽しみの一つでもあった。

特に今日は仲間に出会いたい気分である。理由は簡単。

今朝の兄とのあの重い空気を忘れたいからだ。

（兄さんのバカ…）

大学の講義中も、ノートと教師を交差に見る半面、今朝の兄の態度がちらつき若干の苛立ちを覚えてしまっていた。

結局この日の講義は、あまり集中できないままに終わった。

広葉の入っている研究会の部室は、部室棟二階の五つ並んでいる部屋の内、階段から上がり一番奥の部屋である。

現在の部員は基本的に六人。幽霊部員を入れても八人くらいにしかない少ない人数での活動だ。

特に人見知りをするわけではないけれど、この少ない人数での活動が、広葉の落ち着くポイントともなっている。

「よっ！ヒロちゃん。今日は面白いネタを見つけてきたぞぉ」

部室のドアを開くと、そこには見慣れた先輩の姿と部員四人の姿があった。

それと、あともう二人は広葉の知らない女性二人がいる。

一人は短髪の女性で、もう一人は長髪の女性である。

「こんばんは、先輩。新しい部員さんですか？」

二人とも見た目からして清楚で控えめな女性だ。

広葉の先輩が言っている”面白いネタ”を見つけてきたのも、恐らくこの女性たちだろう。

「そうそう。まだ保留だが、一年生の美女お二人だ。お前の初後輩だぞ」

この研究会は、今年の四月から新入部員を募集していたが、今まで是谁ひとり喰いついては来なかった部だ。

それを考えると、一年生の部員は歓迎するところ。しかし、まだ保

留。

「はじめまして、星崎小夜といいます」

先に短髪の女性が広葉にお辞儀し、自己紹介をした。先輩が言うとおり、結構な美人である。

そしてそれにつられるようにして、長髪の女性も自己紹介をする。

「秋元すみれです」

成るほどこちらも先輩の言ったように美人である。だが、相変わらずと言つていいほど、広葉はそんな美人にも興味を示さなかった。

「永瀬広葉です。もし部内の空気が気にいったら、入部していただけると嬉しいですね」

そう広葉が言うと、すみれと小夜は顔を見合わせ再度広葉に視線を向け微笑んだ。

「私たち、今日はこの部の方たちに提供したいお話があつて来たんです」

そう小夜が言うと、広葉は先ほど先輩が言っていた”面白いネタ”のことを思い出した。

先輩の方へ広葉が視線を向けると、得意顔をした仲間たちが室内の中心にあるテーブルを囲っており、こっちへ来いと手招きしている。

「どんな話ですか？」

広葉が手招きに乗ると、彼もテーブル椅子に座り、その話に興味を持った。

「私が昔に聞いたお話です。…神話、のようなものですね」

そう言ったのはまたしても小夜だった。

「そうだ！星崎さん、お話の続きを…」

先輩が急かすように言うと、小夜は苦笑し、話し始めた。

しかし、その話をしている時、彼女の友人であるすみれは何故か一歩引いた所にいる。

「…？どうしたの？君もこっちで話を聞こう。もう君は知っているかもしれないけど」

広葉はそんなすみれのことを心配し、声を掛ける。

すると彼女は、嬉しそうに笑って彼の隣にやってきた。

「今日のそのネタ、面白かったよ。リーテ神話ねえ…初めて聞いたな」

小夜が語ったのは、パラレルワールドを題材に用いられた空想の神話物語だった。

「もう一つの地球ですか…興味深いですね」

「その話、何処で聞いたの？」

小夜に質問の嵐が巻き起こる中、ほとんど話を聞いていただけのすみれは部室のドアのすぐそばに控えていた。

もう時刻は午後六時。冬ということもあって、辺りは既に暗かった。もしかしたら、暗くなっていることで帰りが少し不安になっているのかもしれない。

「秋元さん」

広葉は、少し不安そうな表情を浮かべていたすみれに話し掛けた。

彼女はまたしても思わぬタイミングで話し掛けられ、今度は少し驚いた色を見せる。

「是非、また来てくださいね。…もしかしたら、今日は付き添いで？」

何となくだが、すみれは小夜の付き添いで来たように感じられた。

「はい…あまりこう言った話はしなくて…あっ！退屈って意味ではないんですけど…」

やはりそうだったか。でもこれを機に、こういった世界に触れるのもいいかもしれない。

なかなか踏み込めない特殊な領域ではあるけれど…。

「人によつて、考え方は色々ですから強制はしませんけど…個人的な意見を言えば、とても楽しいですよ？」

素直に自分の意見を述べると、すみれは少し考えた顔をした。

しばらくして、彼女は答える。

「それじゃあ、入ってみようかな…」

それは独り言のようだったが、それでも確かに入部の意を表したものだ。

午後十一時過ぎ。兄弟は今朝ぶりに顔を合わせると、何気ない顔で話し掛けてきたのは兄の方だった。

「ただいま。父さんは？」

永瀬兄弟の父親は朝から夕方まで働いている。

母親は夕方から深夜までの仕事なので、帰っていないことは知っていた。

「もう寝たよ。夕ご飯、コンビニで買って来てあるから、温めて食べて」

リビングのテーブル椅子に座っていた広葉はそういうと、キッチンの方を指さした。見るとそこにはコンビニ弁当がある。

しかし黄楊はその弁当に手を付けようとはせず、テレビ前のソファに腰掛けた。

「ああ、もう外で食べてきたから……」

すると、テーブルで本を読んでいた広葉は、そっとそれを閉じて兄に問った。

「誰と？」

リモコンでテレビを付けた黄楊は、画面に集中するようにその問いに無視を決め込んだが、やがておもむろに口を開いた。

「——彼女と」

そういった途端、二人の空間はまた別の世界になったような感じがした。

そしてまた、今朝の静寂が訪れる。しかし、今度のそれは長くは続かなかった。

広葉が静かに啖呵を切ったのだ。

「相変わらずだね…兄さん。兄さんは、”彼女”に会いたいとは思わないの…？」

広葉の言葉をまともに聞いて、それに答えると疲れるのは目に見える。

それなのに、毎回のように問われるその問いに、答えてしまうのはなぜだろう。

「くだらないな。俺は俺だけの恋愛を楽しんでいるだけ。広葉だって、顔はいいんだし？そろそろ彼女作ったら？」

二人の”恋愛”の価値観の違い。さっき広葉が言った”彼女”の正体、それは。

広葉は椅子から思いっきり立ち上がり、勢いよく兄に言い放った。

「兄さんは会いたくないのかよ！僕たちは、前世で結ばれなかった女性を、この世で見つけなきゃいけない…！それなのに兄さんは今まで、

“その女性”に対して、何も誠意を示していないじゃないか！恋人ができたと思ったら、すぐに別れてまたその繰り返し。どうしてそんないい加減な恋愛しかできないんだよ！」

この二人。実はとんでもないものを抱えて生まれてきたのだ。

物心ついた時には、もうその記憶の一部始終を思いだし、さらに中

学に上がる頃になると、一部だけではない。

全てを思い出したのだ。——前世の記憶というものを。

かといって、この二人が前世で兄弟同士だったのかと言われればそうではない。

兄弟の前世は、互いに愛しい人と死に別れ、また生き別れとなって生涯を閉じることとなってしまった。

そのため広葉は、生まれ変わったこの世界で再び前世の恋人と巡り合うことに使命を感じていた。

「きつと、彼女も生まれ変わっているはずだ！だから僕は、必ず彼女を見つけ出すっ……！」

だから広葉は、今まで幾人の女性に告白を受けたが交際を断り続けた。

それはまだ見ぬ”恋人”への誠意。しかし、そんな自分とは対照的に黄楊は真逆の行動を取っている。

愛しい人と結ばれることの叶わなかった切なさ、苦しさを、黄楊も知っているはずなのに。

だが、何度弟に同じことを言われようと、黄楊はそれに一切耳を貸さなかった。

正直、心底バカバカしいと思っているからである。

いつも問答無用で問われる弟の疑問に、黄楊が答えるのは彼にもちやんと現世で恋をしてもらいたいからだ。

前世の記憶なんて、そんなくだらないものに縛られている限り、まともな恋愛が出来る筈がない。

それを理解してほしいという願いは、いつも届かないけれど。

「そんなものに縛られているお前が可哀そうだよ」

「…っ！」

だからいつも、こんな言い方しかできない。

それでも届かない。中学の頃から、広葉の想いは変わらなかった。

二人でいる時、必ず前世の恋人の話をしていたのだから。

だからそんな彼に、兄として心配になったのだ。

このままでは、広葉は前世の記憶に喰われてしまうのではないかと。

だからもっと、自分の恋愛を見て、見習ってほしいと思っていたのに。

広葉…、目を覚ませ。前世の恋なんて、この現世では要らないものなんだ。

お前は、お前なりの恋愛をして、早くその過去を拭い去ってくれ。

黄楊のそんな願望にも似た祈りは、広葉に未だに届かない。

結局は、自分で変わるしかないのだろう。

ならば、早く変わって欲しい。その日を、切に願う。

## 記憶（後書き）

S u m m e r   S k y はコミカルでしたが今回はシリアスです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3509y/>

---

Winter Waver

2011年11月8日20時06分発行